

# 海外派遣実績報告書

文化科学研究科比較文化学専攻 大塚 奈美

海外派遣先国：ハンガリー共和国、ルーマニア

海外派遣先機関：伝統の家 ライタ・ラースロー民俗資料センター

海外派遣期間：2008年7月30日～10月28日

## 海外派遣先機関について

カルパチア盆地の民俗伝統の保持と再生を趣旨としてハンガリー共和国の文化遺産相により設立された「伝統の家 (Hagyományok Háza)」は、ライタ・ラースロー民俗資料センター (Lajtha László Folklórdokumentációs Központ)、ハンガリー国立民俗アンサンブル (Magyar Állami Népi Együttes)、民俗芸術指導法ワークショップ (Népművészet Módszertani Műhely) の三部門から成る研究・教育・普及機関である。

1896年にハンガリーの民族学者ヴィカール・ベーラ (Vikár Béla) が初めて民謡を蝋管に記録して以来、ハンガリーではバルトク・ベーラ (Bartók Béla)、コダーイ・ゾルターン (Kodály Zoltán)、ライタ・ラースローらによる民俗音楽の収集が行われ、民俗音楽学の基礎を築いた。ハンガリーの民俗舞踊研究の草分け的存在であるマルティン・ジェルジュ (Martin György) も彼らの師弟にあたる。これらの研究成果が1970年代からの民俗舞踊復興運動であるターンツハーズ運動 (táncház mozgalom) につながり、1981年にはマルティンにより民俗舞踊家の専門の家 (Néptáncosok Szakmai Háza) が設立された。社会的関心の増大により、これが21世紀に入って民俗資料センターとして発展した。1951年に設立されたハンガリー国立民俗アンサンブルは、ハンガリーの民俗舞踊・民俗音楽の収集・保持・上演の役割を担っており、過去に来日公演も行っている。民俗芸術指導法ワークショップは、民俗舞踊や音楽、その他の民俗芸術の講座や研究会を開催したり、教材を制作したり各種催しを行ったりする部門である。(日本語名はいずれも報告者による仮の訳)

## 海外派遣前の準備

海外派遣に当たって、トランシルヴァニア・カロタセグ地方の古い写真の収集に関するプロジェクトを立ち上げた。これは以前より現地でも必要性が語られていたものであるが、費用や人手の不足などから実現されていなかったものである。派遣先であるライタ・ラースロー民俗資料センターの長であり、民俗音楽研究者、音楽家であるパーヴァイ・イシュトヴァーン博士と連絡を取り、受け入れと協力を依頼した。収集した写真及び収集の過程で得られた情報は博士論文にも利用する。自らが中心となって現地の共同研究者・受入機関とメールや電話で連絡を取り、受け入れの態勢を整えるとともに、実際の収集における協力者も募った。ビザに関しては、今回90日以内の滞在ということで必要なかった。

## 海外派遣中の研究

今回の派遣の目的は、前述のプロジェクトの実施と、博士論文のテーマとなる民俗舞踊に関する調査である。到着直後は民俗舞踊・民俗音楽キャンプや村の日など、夏季の催事が複数行われた。民族舞踊・民俗音楽キャンプには地元の民俗舞踊・民俗音楽関係者や住民が参加するほか、ハンガリーを初めとする外国から、現地で民俗舞踊・音楽を学ぼうとする人が集まる。これには部分的に参加し、関係者への挨拶や参加者との交流、踊りの撮影等を行った。ハンガリーのティボルダローツ (Tiboldaróc) よりカロタセグ地方のナーダシュダローツ (Nádasdaróc) への訪問団を迎えた交流会においてはカロタセグの民俗舞踊の紹介・実演者の一人として参加した。イナクテルケ (Inaktelke) でハンガリーの舞踊愛好者などを迎えて催された舞踏会においても撮影等を行った。

トランシルヴァニア・カロタセグ地方の古い写真を収集するにあたって、まず各村の教会に電話・メール・訪問などの方法で調査の趣旨と概要の説明をし、協力を依頼した。承諾が得られた場合には、村を訪問しての予備調査を行った。

実際に訪問したのはマジアルヴァルコー (Magyarvalkó)、カロタセントキライ - ゼンテルケ (Kalotaszentkirály-Zentelke)、キシュペトリ (Kispetri)、イナクテルケ、マーコーファルヴァ (Mákófalva)、カロタダーモシュ (Kalotadámos)、ナジペトリ (Nagypetri)、マジアルジェレーモノシュトル (Magyargyerőmonostor)、テュレ (Türe)、ナーダシュダローツ、ボガールテルケ (Bogártelke) の各村。現在の様子について写真・VTR 撮影を行い、古い写真の収集も行った。収集にあたっては、教会事務所に持ち寄ってもらう、各家庭を訪問するなど可能な方法を臨機応変に選択した。今回の収集では、ラップトップパソコン、フラットベッドスキャナを持参し、その場で写真を読み取り、保存して原本を返却した。貴重な資料を扱うため、最も事故の恐れが少ない方法として採用しているが、手持ちの機材が最新のものではないこともあり、かなりの時間がかかる。今回の派遣終了後もプロジェクトは継続するが、より効率的な手段も検討している。

ハンガリーでは、派遣先機関である伝統の家のライター・ラースロー民俗資料センター及び同機関他部門、ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所などの関係機関を訪問し、具体的な助言を得たり、今後の研究について話し合ったりした。また、都市における民俗舞踊実践の場に参加した。



マジアルヴァルコーの教会天井



カロタダーモシュの教会内部



テュレの日／収穫祭



カロタダーモシュでの写真収集

## 海外派遣中に行った研究以外の活動

カロタセグ地方の馬術伝承者たちとの交流や各種催事への参加、農村生活の実践など様々な活動・経験をしたが、派遣中の活動は、すべて何らかの形で研究と関わるものと捉えている。ハンガリーでは、今回の収集の協力者ともなった日本からの若い留学生に関係機関と研究者を紹介し、学术交流の促進にも努めた。



収穫後の豆の処理作業



伝統の家訪問

## 海外派遣費用について

渡航先が日本からの一般的な旅行先から外れるヨーロッパの地方都市を含んでおり、乗り換えが最低 2 回必要となるため、直行便で行ける目的地と比べ航空券の基本料金自体がやや割高である。また、渡航時期が 7 月末で航空料金の高い時期であること、渡航期間が 1 ヶ月を越えること、燃油料金の高騰、ユーロ高（出発時）などが重なり、航空運賃が高額となった。エコノミークラスであるにも関わらず 1 人当たり 50 万円台以上とい



車での移動途中の昼食休憩

う見積もりも多く閉口したが、最終的になんとか 30 万円以内に

抑えた。同日乗継が不可能な区間もあり、その宿泊費や、ホテルと空港の往復運賃の出費も避けられなかった。このような状況で、少しでも安い航空券や宿泊先を探そうとかなりの時間を費やしてしまった。

派遣先での主な出費は移動費（鉄道、バス、車、馬車等）と宿泊費の一部、食費等の生活費であった。中でも、車での移動費が大きい。食事は外食を避け、ほぼ自炊とした。奨学金の受給はなく、派遣前の 3 ヶ月間はアルバイト等に従事した他、一部個人からの寄付をいただいたことにより、今回の渡航調査が可能となった。改めて感謝の意を表したい。



## 海外派遣先での語学状況

派遣先機関はハンガリーにあり、ハンガリー語を使用する。調査地は主に現在のルーマニア国内のハンガリー人集落で、主にハンガリー語が用いられている。公共交通機関の利用時や公共の場（駅、商店等）、一定以上の比率でルーマニア人の住む村ではルーマニア語が必要となる。今回の海外派遣前に約4年間ハンガリーへの留学経験があり、ハンガリー語に関しては使用歴が長いので、日常生活においてはほぼ支障がない。調査地においてはその地方独自の語彙や言い回しもあるが、それらについてもある

程度習得している。ルーマニア語は使用頻度が低いこともあり、自力で理解・表現することが難しいが、必要に応じて現地の共同研究者の助けを得ることができた。



カロタセグ地方最大の蚤の市

## 海外派遣先で困ったこと

瑣末なことでは、農村部では電気や水の供給が不安定で、必要なときにパソコンが使えない、真っ暗になってしまう、洗い物や調理ができないなどのハプニングが何度かあった。また、交通機関も時刻どおりに動かないこともあり、物事を予定通りに進めるのは容易ではない。

派遣前に既に判明していたが、ブダペストクルージュ・ナポカ間を時期によっては陸路より安く、短時間で移動することができる格安航空便が昨年度は運行されていたのだが、これが運休（目的地変更）となった。通常の航空便はあるが高額のため、ブダペストクルージュ間は従来のように半日かけて陸路での移動となった。ブダペストの東駅では、国際列車切符売場が最近番号札制になったようであったが、案内窓口が閉まっていたため、購入窓口での1組あたりの所要時間が長くなり、番号は遅々として進まなかった。列を作って待っていた時代よりも格段に時間がかかる上に融通が利かず、予定の列車に乗れない人が続出していた。国際列車利用の場合、従来にも増して時間の余裕を持った行動が必要となりそうだ。移動に関して、農村部で移動手段がない場合5km程度の距離は徒歩で移動することもあるが、山を越えるためきちんとした道があるとは限らない。これを独りで移動することになってしまったことがあったが、その土地で育ったわけではない私にとって、周りは畑や草地ばかりで何の目印もない上に人通りもなく不安なものであった。ブダペストでは地下鉄建設に伴い、市内交通網が変更されていたり、運賃システムの変更があったりでやや戸惑ったこともあった。

個人的なことでは、2歳の子どもがいるため、その世話と自分の研究との兼ね合いが難しかった。今回派遣期間中のごく一部ではあったが、数日間調査協力者を得ることができ、子どもとの相手もしていただけただけのはとてもありがたかった。

## 海外派遣を希望する後輩へアドバイス

募集の告知があってから申請の締切までの期間が比較的短いことから、募集があってから派遣先を選定し受け入れ承諾書を取り付ける準備を始めてはスケジュール的にかなり厳しい。日頃より海外関係機関や研究者との連絡を密にしておくことが、スムーズな海外派遣につながるのではないと思う。航空券の手配に関しても、時期により料金や空席の状況がかなり異なるので、派遣時期が固定されていない場合、航空券に関する様々な情報を知っておくことは派遣時期を設定する上でも有益であると思う。また、渡航先がいわゆる主要都市でない場合、直行便がない上に航空路線やスケジュールの変動も時折あるため、今回の私のように、どうしても同日乗継が不可能な場合も少なくないと思う。派遣地に関してはある程度の知識や経験があっても、乗継地に関してはわからないことが多く、低予算かつ空港に近い宿泊先を探すのに意外に苦労した。このような意味でも、普段から広く情報収集をしておくことが役に立つのではないと思う。